

平成 27 年度
福井大学国際交流センター

外部評価報告書

平成 28 年 3 月

はじめに

福井大学国際交流センター外部評価委員会のメンバー4名は、平成28年2月24日に福井大学のキャンパスを訪問し、国際交流センター長、副センター長をはじめ、国際交流センターの構成員へのインタビュー調査・意見交換、ならびに教室、研究室、グローバル・ハブ、留学オアシス、総合情報基盤センター、附属図書館・言語開発センター、国際課オフィスなど国際交流事業に関わる学内施設調査を通じて、国際交流センターの活動の実相に触れる機会を得た。

本報告書は、大学から事前に送付された「福井大学留学生センター自己点検・評価報告書（平成19年から21年度）」、「福井大学国際交流センター自己点検・報告書（平成22年～26年度）」およびその他の出版物、書類などに基づく事前の外部評価、ならびに訪問調査（インタビュー調査・学修環境調査）、訪問調査後の外部評価委員の専門分野における評価のとりまとめを基に作成したものである。

なお、今回の外部評価は、平成19年度に実施された前回の外部評価から8年が経過しており、この間、外部評価での指摘をふまえ、多くの取組み・改善に努められていた。

組織面においては、平成25年4月、これまでの『留学生センター』を改組し、外国人留学生に対して必要な日本語教育・指導助言などを行なうとともに、教育指導の充実および留学生交流の推進を目的とする「日本語教育部」に加え、新たに外国人留学生の多様化・受入れ増などの推進による国際的なキャンパスの創出、日本人学生の言語運用能力と異文化理解力を鍛え、さらに留学によりグローバル人材の育成を目的とする「グローバル人材部」を有する「国際教育部門」と「国際連携部門」から成る大学の国際化戦略を推進する機能を持った新たな組織に変革を遂げた。

事業面においては、留学生への日本語教育・日本人学生への留学に向けての英語力向上のための教育事業をはじめ、国際交流・日本人学生の海外留学の充実、留学生の同窓会組織による活動、留学生や同センター教員などによる地域貢献事業など、さまざま改善が図られた軌跡を窺い知ることができた。

以下、要請にもとづき「教育」、「学生支援」、「社会貢献」、「管理運営」の4項目に対して報告を行う。

【凡例】

総合評価は、5段階評価（S・A・B・C・D）で行っています。

S：優れている A：良好である B：適切である
C：一部改善を要する D：問題があり大幅な改善を要する

[1] 教育

国際交流センターが実施する教育として、大学院入学前予備教育としての日本語研修コース、福井大学と学術交流協定を締結している大学などからの短期留学生を受け入れる短期留学プログラム(UFSEP)、全学向け日本語コースを設置している。これらにおいて、学生のレベル、ニーズに応じた日本語教育を行っている。

また、国際交流センターがコーディネートする全学向けの教育では、学部共通教育、学部専門教育、大学院教育のほか、国際交流センターと大学院工学研究科の共同企画・実施による「さくらサイエンスプラン・初等日本語講座」において日本語教育を担当するなど、多岐にわたり留学生などを対象とした日本語教育を展開している。

1. 評価できる点

1) 日本語教育が適切に行われている

いくつかの目的別コースに分かれ多様なクラス運営がされているが、それぞれにおいて、クラスサイズ、教材、レベル設定も概ね適切に行われている。アンケートの結果を見ても満足度は高い。特に短期留学プログラム生の多くが大学院生として戻ってきているのは素晴らしい。また、日本語能力試験対策のための授業など特色ある試みも見られる。非常勤講師との連携も十分図られている。

2) 教員の研究結果を教育に生かしている

専門を生かし、教材の自主開発を行っている点を評価する。オンラインで使用できるようにした点もよい。

2. 改善を要する点

1) 大学の方向性を見極めた上でのプログラムの見直し

現在の体制は今のところは十分に機能していると認められるが、今後、福井大学が国際化を進める上で留学生数の増加も見込まれるため、大学の方向性を見極め、一度留学生に対する全学的なニーズ調査を行い、日本語教育全体の見直しを行ってはどうか。限られたリソースを有効に使うという点でも重要である。

2) 受講生の意見を聴取する工夫

受講生の満足度などの意見を聴取する方法としてアンケートを利用しているが、まだすべてのプログラムで行われているわけではないようである。学生からのフィードバックを更に生かすために、授業評価をより多くのコースに広げ、またオンラインで受けられるようにするなど工夫して、強化を図ってはどうか。

3) 教室などの施設の充実

教室などの施設は様々な点で改善が望まれる。日本語教育に限らず近年では視聴覚教材を使用する授業が多いので、すべての教室にプロジェクタ等パソコンでの教材提示が簡単にできる環境を整えるべきである。暖房などの設備も改善の余地がある。

3. 総合評価

【A】 良好である。

全体的に見て、現段階では福井大学の留学生および日本人学生に対する国際交流センターとしての教育は十分に機能していると評価できるが、将来の福井大学の方向性を踏まえて、更に改善の余地がないか見直しの準備を始めて欲しい。

[2] 学生支援

外国人留学生への学生支援として、各種学内活動および地域交流活動を通して、留学生、同窓生、日本人学生、地域市民、産業界などとの多面的なネットワークの構築・活用による学生支援が展開されている。

また、留学の動機づけ、短期海外研修プログラムの充実、必要な教育および指導・助言、情報提供など日本人学生の海外留学に向けた支援も積極的に行われている。

1. 評価できる点

外国人留学生の受入れ・日本人学生の派遣双方において、支援体制（組織・仕組み）が整備されている。大学の中期目標に謳われた「国際交流センターに国際交流の機能を持たせ、国際交流の一層の推進を図る」ことの実現に向け、新設学部（国際地域学部）における、国際交流センターを核とした学内外ネットワーク型支援体制の構築をグッドプラクティスとして学内に示し、その成果を広く共有することで、「連携スピリット」の醸成ならびに構築された仕組みの全学的な波及・共有化の推進が期待される。

1) 受入れ留学生に対する支援が適切に行われている

渡日時オリエンテーションにおける地域等とも連携した諸サービスの提供、企業と連携しての手厚い就職支援は評価できる。在学中の留学生ケアに関しては、センター教員による初期対応と連動する形で、大学全体のカウンセラーとの協力体制が整備されている。同窓生と大学とのネットワークの構築など卒業留学生に対するケアも、持続的な人材の好循環を生みだすリソース活用の好事例として、評価に値する。

2) 留学派遣学生に対する組織的な支援体制が行われている

平成 25 年度のセンター改組以降、支援体制ならびに環境（機能・スペース）が抜本的に改革・強化され、組織的な充実化が進められており、大いに評価できる。個別留学相談の実施、多文化交流commonsとも言うべき空間の創出や5大学開放科目等による留学促進コンテンツの提供、海外留学ロードマップやグローバル・コンピテンシー・モデルの明示による必要情報の整理等により、留学に対する興味・関心の掘り起こし・喚起が推進されている。新規交流プログラムの立ち上げも精力的に行われており、派遣プログラム応募・参加者の増大へと繋げている。

2. 改善を要する点

1) 留学生にかかる授業環境の整備

留学生の受入れに関して、授業環境（教室）の整備は急務と思われる。留学オアシスやグローバル・ハブ、図書館内交流スペースの充実度（設備・什器・保管収容資料・室内環境全般）に比して、留学生が日常的に使用する教室の環境整備が著しく遅れていることは大きな問題と言える。帰国留学生による所属大学への当該事項の報告（情報の拡散）も懸念される。キャパシティの面からも、将来的に受入れプログラムが拡大し、受入れ人数が増大した場合には、対応が厳しくなることが容易に予測される。同じく、留学生に対する日常的なケアに関しても、受入れ人数が増加した場合には、相応の組織・体制の整備補強が必要になるとと思われる。

2) 留学生にかかる施設分散の解消など

地理的・物理的に施設が分散している問題については、一朝一夕の改善は困難であることは理解できるが、問題を認識するのみでは解決しない。常に将来構想（課題）の上位に置くなどして、学内執行部の理解・支援を得るための努力を継続する必要があると思われる。留学生用の住居の確保に関しても、自治体との連携をはじめ、継続的な努力が必要であろう。

3. 総合評価

【A】 良好である。

学生支援の充実化を通じて、国際交流の推進のみならず、大学全体の国際化（組織改革）を進めようとする野心的な取組みを展開されているので、今後の活動に期待したい。

[3] 社会貢献

国際交流センターのもと、留学生の活動を軸とした社会貢献活動の推進について、市民レベルでの草の根的な地域社会との相互支援交流活動を中心として、地域の自治体・経済界などとの交流が複層的に展開され、そのネットワークが構築されている。また、在学留学生による留学生会、帰国留学生による同窓会が組織化され、さまざまな活動を展開している。

1. 評価できる点

1) 留学生の地域での交流活動が活発に行われている

「地域の産学官民各層とのネットワーク、福井大学留学生同窓会各国支部網とのネットワーク、在学留学生組織である福井大学留学生会を軸としたネットワークを活用して、地域産官学民との重層的な交流活動を展開し、地域社会の国際化に貢献する」ことを、留学生諸活動を軸とした社会貢献活動における事業推進の基本理念に掲げ、小学校の総合学習、企業への通訳、地域での語学講座講師や文化教室講師、また公民館や幼稚園の活動などに参加し、地域社会の国際化支援活動を展開している。

2) 留学生の同窓会組織が適切に機能している

留学生同窓会組織は、マレーシアを皮切りに、タイ、インドネシア、韓国、中国（西安、上海、杭州、北京）、台湾、ドイツ、バングラデシュ、ミャンマーに支部が設立さ

れ、会員間・支部間での情報交換・交流や連携活動、福井大学との相互協力、また 2013 年には学生同窓会世界大会が開催されるなど、極めて強固なものとなっている。

3) 教員活動が地域貢献においても機能している

教員による社会貢献活動については、地域在住の外国人のための日本語ボランティアスタッフの育成のための各種講座の講師をはじめ、地元自治体・経済界、国際交流団体への活動協力、県内の産学官民レベルの国際交流、国際化の推進にかかる幅広いテーマへの相談対応などを通して教員の知財の地域への還元など、各々の教員の立場で社会貢献に積極的に参画している。

2. 改善を要する点

特にありません。

3. 総合評価

【A】 良好である

地域交流・国際交流が複層的に展開され、そのネットワークも構築されている。また同窓会組織が極めてしっかりしている。留学生の地域活動については、勉学に支障の出ないようにしながらも、引き続き積極的に参加され、地域社会の国際化に貢献してもらいたい。

個人差こそあれ、教員は社会に対してさまざまな形で成果を発信している。今後、教員個人の活動が国際交流センター全体としての活動に発展していくよう期待する。

[4] 管理運営

大学の理念に沿った国際交流事業の推進にあっては、国際交流センターを旗艦とし、全学グローバル人材育成推進委員会、国際交流企画会議、学部・研究科留学生委員会、教務学生委員会等全学あるいは学部の関係委員会、ならびに語学センターなど関係機関と連携を図りつつ大学の国際化を展開している。

また、センターの運営に関する事項を審議する機関として「国際交流センター運営委員会」を置くとともに、センターの日常的な業務を円滑に進めるため、センターの専任教員で構成する「国際交流センター専任教員会議」を置いている。センター業務の事務

および総括は学務部国際課が所掌している。これらの組織体が大学の国際化展開を支える重責を担っている。

1. 評価できる点

1) 目的を達成する上で必要な体制が整備され、機能している

従前の留学生センターは、「グローバル教育部門」と「国際連携部門」を擁する大学の国際化を牽引すべく『国際交流センター』に組織改編され、そのセンターの長には大学執行部の理事（国際担当）・副学長を配置するなど、全学をあげての大学の国際化の中核を担う体制の整備が図られた。

センターは、総合的かつ効果的な国際交流事業の推進に寄与すべく、留学生・日本人学生の別を問わず、グローバル人材の育成などに向けたプログラムの開発・企画・運営が、同窓会ネットワークの活用などと並行して精力的に行われている。

2) 活動状況の結果が、学内および地域社会に対して適切に公表されている

センターの活動状況については、WEBサイト上に日本語教育、留学などにかかる情報、学内外の交流活動、紀要（研究活動成果など）ならびに自己点検・評価報告書を掲載し、広く公表している。

これに加え、「国際交流・留学」WEBサイトを別途構築し、留学基本情報、奨学金、協定校、留学体験記など「海外留学にかかる情報」を中心に公表している。その構成、内容などは、学生にとってたいへん有益かつ留学への動機づけになるよう工夫されている。

2. 改善を要する点

1) センターの執行体制

現在、国際交流センター長および副センター長とも理事兼副学長が務められている。また、センターの運営にあたり、留学生の教育・学習支援、学生の海外派遣など、国際交流に関わる重要な事項を審議・決定するため、国際交流センター運営委員会が設置されているが、委員長はセンター長が務めており、大学トップマネジメント層の意向が反映され、迅速な意思決定が行える利点がある。しかし、これを補佐する副センター長に関しては、センター運営の機能性、業務の専門性・多様性などに鑑み、国際交流事業などに精通したセンター教員から選出されることが望ましい。

2) ファシリティ・マネジメントのあり方

今回の訪問調査において、留学生の学修環境とりわけ教室などの施設において衝撃を

受けた。留学生の日本語教育を施す教室などのほとんどは、学内の老朽化した建物に散在し、なかにはパーティションで間仕切りをしてあつらえたものなど、学ぶ環境としては目に余るものがあった。隣接の建物には留学生を受け入れる学部などの新しく立て替えられた建物もあり、そのなかに留学生のための教室も確保することも可能であろう。

今回は留学生の宿舎などについて見ることはできなかったが、今後、大学の国際化を推進するにあたっては、留学生の学ぶ環境・生活する環境の整備にかかる全学的な見地からのファシリティ・マネジメントを行う必要がある。

3) PDCA サイクルによる戦略的マネジメントと内部質保証の確立

自らの点検・評価は、それ自体が目的ではなく、自ら定めた目標と実行結果のギャップを分析し、次なる改善に向けた「改善策」（年次計画）を立案・実行するマネジメントを行うことが肝要である。大学の国際化を牽引する学内共同教育研究施設としての機能を果たすため、自らの責任で PDCA サイクルを適切に機能させることが求められる。

そのためには、大学の理念・目標、国際化戦略にもとづき、センターの中期目標・中期計画を策定の上、これらを達成するための年次計画の策定・実践により、グローバル教育、大学の国際化、地域の国際化などのさらなる高みをめざすため、PDCA サイクルによる戦略的マネジメントの展開が、ひいては内部質保証を機能させることに繋がる。

また、国際交流センターの目標・目的等については、必ずしも学外はもとより学内にも的確に伝わっていないところが散見されるので、今後の中期目標・計画の策定などの機会を活用しつつ、ステークホルダーにより分かりやすくセンターの目標・目的、事業活動およびその成果（アウトカム）などの可視化（「見える化」）に努める必要がある。

4) 外部評価のあり方

内部質保証の観点からも、外部評価については、7年に1回の認証評価機関による評価の中間にあたる3年に1回程度の定期的な受審を提案する。

また、外部評価での現地調査において、日本語教育あるいはグローバル教育などセンターが関わっている授業の参観に加え、センターの運営に携わる委員、スタッフ、外国人留学生、留学したあるいはこれら留学しようとする学生へのインタビュー調査を加えることにより、大学の国際化の旗艦となるセンターの活動を多角的に評価することが可能となろう。

3. 総合評価

【D】 問題があり大幅な改善を要する

運営責任者としてのセンター長には、理事（国際担当）・副学長を据え、大学のトッ

マネジメント層の意向がスムーズに反映できる体制を整えるとともに、「有機的・総合的な国際交流推進」組織としての国際交流センターが整備され、大学の国際化にかかる事業を推進し、様々な成果を挙げられていることは評価できる。

しかし、上述のとおり、センターの執行体制、ファシリティ・マネジメントのあり方、PDCA サイクルによる戦略的マネジメントと内部質保証の確立、外部評価のあり方などセンターの管理運営において、多くの改善を要する点を指摘した。今後これらの改善点の対応にいかに向き合うかが課題となろう。

また、センターには国際教育部門のほか、国際連携部門が設置されている。この部門の業務内容として、主には外国の大学等との国際交流に関する業務を行うこと（福井大学国際センター規程第6条第3項）が規定されているが、同部門の自己点検・評価については報告書にも記載されていない。そのため、活動内容・実績ならびに実施主体について知る術もなく外部評価ができなかった。センター長の責任において、早急に同部門の自己点検・評価を実施するとともに、その結果を速やかに公表されたい。

【講 評】

今回の外部評価を通して感じたことは、個々のメンバーの皆さんは一生懸命頑張っておられるということです。

引き続き、地域に立脚する国立大学として、地域の特質などを勘案し、留学生や日本人学生に対するグローバル教育、大学の国際化、地域社会の国際化のために有機的・総合的な国際交流推進の使命を果たすべく努力してもらいたい。

○ 教 育

全体的に適切な教育が行われています。

限られたリソースをできる限り使って教育を行っている判断しました。ただし、今後の大学の方針を踏まえて、今後の教育内容の見直し、再編成を期待します。そのためにアンケートの取り方も含め、学生のニーズの正確な把握、それから留学生教育に対する大学の組織全体の意識を捉えて、その再編に備えてほしいと思います。

また施設等に関しては、建物、設備、教室・教官室等の配置については、できれば早急に改善をお願いしたいと思います。

○ 学生支援

全体的に非常に良好に行われています。

学生支援を大きく体制の面と環境の面で考えました。特に体制の面においては、学内外との連携を図るということで、個別にいろいろなところ、学内図書や学外の組織、ネットワークを活用して柔軟な対応をされていると思いました。特に国際交流センターが中心となり、音頭を取る形で横断的なチームを組むような体制が見受けられますので、それが一つ、あるいは固定のプログラムに限らず、このような体制が全体的に波及していく形になると、ますます良いのではないかと思います。

環境の面では、主に学習環境、生活環境、住居など幾つかあると思いますが、それらについても整備が進んでいると思いました。ただ、こういったものは、箱物に加えて中身（コンテンツ）、人員配置、予算配分が付いて回りますので、それらに関しては現実的には思い描いたデザインのとおりにはなかなか運ばないと思いますが、そのあたりのバランスをうまく取りつつの交渉、調整など、これからも尽力されることを期待します。

○ 社会貢献

国際交流センターの社会貢献活動について、全体として適切に積極的に行われています。

留学生については、地域に溶け込んだサークル活動などに参加していると思われます。引き続き、学業に支障のない範囲で地域への国際交流活動などに参加していただくことを期待します。

また、海外の留学生同窓会組織は貴重なリソースであり、国際広報（学生のリクルーティング、イベント等）などにおいて、海外拠点に代わる機能を担っている部分も有しているため、持続的に密な連携がなされるとよいと思います。

○ 管理運営

「留学生センター」から「国際交流センター」に改組されて、これまで外国人留学生の日本語教育に焦点が置かれていたが、これら教育面に加え、日本人学生の海外への派遣にかかるプログラムなどの展開など機能面においても充実させ、大学の国際化を推進すべく組織への改組による相乗効果も現れています。

しかし、センターの運営体制、および外部評価の実施（評価項目、実施頻度・内容など）などにおいて、管理運営における課題も散見されます。センター長のリーダーシップのもと、福井大学の国際化の旗艦としてのセンターの戦略的マネジメントの実践を期待します。

最後に、今回の外部評価にあたって、協力いただいた学務部国際課および国際交流センターなど関係部署のスタッフの皆さまに心から感謝いたしたい。

[外部評価委員会構成メンバー]

委員長： 吉崎 誠（関西外国語大学・事務局長） [管理運営]

委員： 峯 正志（金沢大学・国際機構留学生センター 教授） [教育]

委員： 三橋 紫（京都大学・国際交流推進機構 特任教授） [学生支援]

委員： 藪田 智成（(公財)福井県国際交流協会・専務理事兼事務局長） [社会貢献]

【委員の役職名は、平成28年3月現在の肩書である。】